

男子部中等科・高等科

「学業報告会 運営グループ」

鈴木裕大 山本太郎

この期間は、端的に言えば学び方を問い直すために生徒と教職員が協働して行なう大規模な実験である。事実、過去2回で試行錯誤してきた「異年齢グループ」「自主選択テーマ」「発表・共有方法の選択」「リフレクション」は、イベントで完結することなくその後のさまざまな学習の場面に応用されている。今年度、学内では「共生・共学」構想が発表され、女子部・男子部の垣根を超えた新しい学校づくりの方向性が打ち出された。そのことは多くの混乱と戸惑いを生んだ一方で、自分たちの当たり前を問い直し、再構築していくクリエイティブな機会ともなっている。学業報告会もその流れと密接に繋がっている。これからの自由学園はどのような学びを構築していくのか、今回も多くの試行錯誤と実践、リフレクションがなされた。「運営グループ」による活動の記録を通じて、2019年度学業報告会の総括を行なう。

I. キックオフ

今年度も鈴木と山本が教師会から本イベントのマネジメント担当に任命された。生徒アナウンスに先駆けて教師会では教員発案のテーマを募った。6月上旬には全生徒に向けて、学業報告会の趣旨やスケジュールについて説明したうえで、教員から提出された16のテーマを公開してエントリーを募った。また同時に生徒からの自主テーマも募った。エントリーには集計作業を簡略化するためにgoogleフォームを使用することとした。

II. 探求期間の活動内容記録

1. 運営グループの発足

報告会のマネジメントを行う「運営グループ」には2年前のメンバーから3名、2年前に入学していなかった学年から2名の合計5名がエントリーしてくれた。グループは「事務的なことは前回を大いに参考に」しつつ「どのようにしたら学びが促進するか」にメンバーのエネルギーを注ぐという方針を定めた。未経験の生徒には前回の動画を視聴してもらってイメージを共有しつつ、前例踏襲に陥らないように創造的な指向を心がけた。

2. 活動グループ決定

複数回の説明とエントリー、調整を経て10月下旬には前回を上回る28のテーマが定まり、メンバ

ーも決定した。グループの学びがより闊達に行なわれるよう、

- ・活動費の事前支給

- ・電気機器使用や校外学習のガイドライン

などを運営が定め、各グループに提示した。それを受けて各グループは活動計画を検討し、運営に提出することとした。

3. 当日のプログラム策定

各グループの希望する発表方法や発表時間をもとに調整を重ね、全体のプログラムを決定した。ステージ発表とポスターセッション以外にも、作品展示や実演など、多岐にわたるものとなった(次項参照)。

4. 女子部との協働

テーマ設定やエントリー、会場の設営に関しては女子部との連携を密に取った。紆余曲折があるなかで、「未来の自由学園を考える」グループは男女合同で探究を行ない、さらにそのグループから一部女子生徒は「良いデザインとは何か～新しい学びの空間をデザインしよう～」グループに出向することとなった。女子部と男子部とでは活動期間や発表日が1週間ほどずれているため、実際には連携が取りづらい部分もあったが、お互いの姿から学ぶことも多く、有意義な機会となった。

<当日のプログラム>

時間	タイトル
午前の部	9:30 オープニング
	9:40 たためる構造の研究と応用
	9:52 多様性のある社会をデザインする
	10:04 持続可能なコンビニ
	10:16 視覚効果の世界
	10:28 働き方改革は本当に改革になっているのか
	10:40 オープンスクールカフェプロジェクト
	10:52 良いデザインとは何か～新しい学びの空間をデザインしよう～
	11:04 (予備)
	11:10 ポスターセッション①
昼休憩	11:40 昼休憩
	12:00 昼食開始(申し込まれた方のみ) 於:男子部記念ホール
	12:20 プレゼンテーション① 男子部生 勝ち飯を考える!
	12:30 プレゼンテーション② 学園カレー
	12:50 昼食終了
午後の部	13:00 ポスターセッション②
	13:30 80回生のすべて(仮)
	13:42 心・体・声を使って表現する
	13:54 地球温暖化をぶっ飛ばせ～僕らにできる事～
	14:06 自動警備ロボット製作プロジェクト
	14:18 エコな暮らし方を Old-JAPAN から 発見する
	14:30 自分のルーツを調べる
	14:42 人は、いのちを頂いていのちを繋ぐ
	14:54 自然に優しい農法
	15:06 未来の自由学園を考える～ソーシャルアクションへの道のり～
	15:18 (予備)
15:30 パネルディスカッション(生徒・卒業生・教員)	
16:00 クロージング	

	タイトル	会場
展示	私たちのゴミの行方～ゴミの追跡を通した暮らしの再検討～	講堂 1階
	多様性のある社会をデザインする	
	筋力トレーニングで身体を問い直す	
	自分のルーツを調べる	
	小水力発電への挑戦 part2	
	働き方改革は本当に改革になっているのか	
	我々は歴史的にどこに立っているのか～現代の我々の問題はどこから来るのか～	
	未来の自由学園を考える～ソーシャルアクションへの道のり～	
	学園カレー	
	コーヒーの健康効果とその歴史	
特別展示	良いデザインとは何か～新しい学びの空間をデザインしよう～	講堂 2階
	超次元学園 5年 A組	
	心・体・声を使って表現する	
	人生の意味を問い直す	
	アーティストレジデンス in 男子部	
	たためる構造の研究と応用	
	地形模型の作成	
特別展示	良いデザインとは何か～新しい学びの空間をデザインしよう～	男子部 体操館
	人は、いのちを頂いていのちを繋ぐ ※当日の事情により実施しない場合があります	男子部 入口
	秋のジャム作り	講堂 入口
	自動警備ロボット製作プロジェクト ※雨天の場合実施いたしません	講堂 前池
	カンボジア写真展	しのめ 茶寮

5. 探求期間の実務

11月11日(月)から11月22日(金)までを探求期間として、通常授業を無くしてグループごとで活動した。前回にも増して様々な取り組みが増え、校外学習やゲスト招聘、期間内にイベントを行なうなど、グループ活動は多岐に渡った。

探求期間を迎えるにあたっては、

- ・ 道具の貸し出し
- ・ 活動場所
- ・ 校外学習
- ・ 活動費の支払い

等について決定し、探求期間初日のミーティングで全校に周知した。調べ学習に不可欠なインターネット環境については、8:00から16:30のあいだ、誰もがアクセスできる無線LAN回線を準備した。各グループの活動が始まると、運営メンバーは、

- ・ ステージのアドバイザー
- ・ ポスターセッションのアドバイザー
- ・ 会場
- ・ 会計
- ・ 道具

を分担した。運営や各グループリーダーの連絡は基本的にLINEで行ない、ファイル等の共有にはgoogleドライブを用いた。また前項に記した会場の設営、アナウンス文の検討、アンケート用紙の作成なども並行して行なった。毎日の放課後には各グループのリーダーを集めて、情報共有に努めた。

6. 見えてきた方向性と新たな取り組み

(1) 双方向型の仕掛け

前述のように、今回は運営グループの主眼を「行事を成功させること」から「この行事によって学びが促進されること」にシフトすることを心がけた。2017年の行事に運営として携わった生徒からは『お客様：聞き手』『生徒：発表者』という構図が固定化しないダイナミックな時間にしたい」という要望がでた。お客様が生徒の学びの評価者になるのではなく、生徒もお客様もともに学びあう時間にするためには双方向性のしかけが必要だと考えた。そこでポスターセッションの時間を拡張したほか、ステージ発表では質疑応答に加えてgoogleフォームを使ってリアルタイムにコメン

トが生徒に届く仕組みを整えた。また「学びの樹」と題した、ワークショップ型研修で行なわれるような会場参加型の取り組みを計画した。

そのほかにも、お客様の席を「勉強が好きか嫌いか」に分かれて座っていただくことなど、当日も含めて参加する全ての人が自分自身の学びの履歴や学び方について問い直しができるように、前例に囚われずに大小さまざまな仕掛けを考えた。

(2) 生徒の学びあいの仕掛け

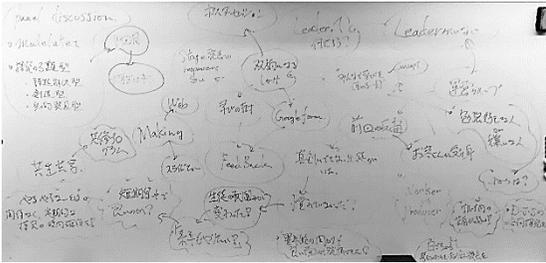
運営の生徒達から「グループ活動に内向きにならずに相互の共有から学びを広げたい」という提案があった。そのための方策として、ポスターセッションのリハーサルを生徒が来場者役となつて行なうことや、ステージ発表のプレゼンテーションを、会が終わってからの期間に生徒達に向けて行なうことなどを実施することとした。また会の翌週にはグループでのリトリートの時間を取り、学びが個人の振り返りに留まらずグループとしてお互いの学びの成果をセレブレーションし合える時間を設定した。

(3) 評価観の転換とパネルディスカッション

「お客様：評価者」ではなく「お客様：ともに学びあう人」という構図に転換されていくなかで、運営メンバーのなかから「ではこの学びは誰が評価するのか」という問いが導き出された。会の締め括りにはお招きしたゲストに講評をいただくことが通例となっていたが、今回はそれを自分たちで行なうことで、「学びの評価は自分自身および相互に行なうもの」というメッセージを打ち出せるのではないかと考え、パネルディスカッションからクロージングにいたるまで全て生徒が行うこととした。進行に2名、各グループから3名、先達として今学問の道を歩んでいる若い卒業生2名と助言者の教員1名を加えた合計8名でパネルディスカッションを行うこととした。生徒パネラーの選定には、苫野一徳さんの提唱する“プロジェクトの3類型(課題解決・知的発見・創造)”を用いてグループを絞り込んだ。

V. 生徒のリフレクション

運営グループは会の翌週に学園新聞編集部取材を受けた。自分たちの学びを言語化していくことで、気づきや発見も得られたよい時間となった。生徒や教員の発言をその場で見える化したものを以下に記す。



VI. 次年度以降への提言

1. 「学業報告会」という行事に対する提言
行事の質と量を担保するために2案を提言する。

(1) 2日間開催

理由：テーマ数の増加に対応した時間確保

課題：食事提供担当・運営担当の負担増

解決案：土日開催・月曜日代休

(2) インターン導入

理由：テーマ指導教員、アドバイザー教員の負担軽減と生徒の学びの質の担保

課題：派遣学生の質の担保・派遣学生の評価

解決案：大学院研究室や大学教職ゼミとの連携

2. 主体的な学びの促進に対する提言

学業報告会期間中の生徒の満足度は高く、普段はなかなか見ることのできない生き生きとした表情に出会えることも多い。その理由は、

- ・テーマを自分で選んだこと
- ・同じ目的、指向性を持つ集団に属していること
- ・細切れの時間割ではなく落ち着いて一つのテーマを深められること
- ・グループでスケジュールを決定できること
- ・異年齢集団を形成することで、同質であることが求められず、違いや能力差が許容されることなどが考えられる。一方で、通常の授業との親和性が高い行事であるにもかかわらず、現状としては、イベントとして日常と乖離した学習形態にな

っている。今回の取り組みに対して学習の有効性を検証したうえで、カリキュラム作成において探究活動、異年齢グループ活動を推進し、日常の学びに落とし込んでいくことを強く提言したい。

実は上に記した「次年度以降への提言」は2017年度年報に記したものとほとんど同じである。つまり、2年間経っても実現に至っていない積み残しである。しかしながら2020年度からは女子部・男子部ともに「探求」の時間が設けられるなど、今まさに変容のときを迎えている。学びを日常に、分かち合いを日常に、生徒も大人も「学習者」であるように。このような学園になる日もそう遠くはないのかもしれない。

VII. 謝辞

副学園長の成田喜一郎先生には前回に引き続き多大なご支援をいただいた。パネラーとして登壇してくださった福井周さん(76回生)、増田晶さん(77回生)にも大変お世話になった。

また、学内各部署、とくに広報本部、食糧部、女子部、リビングアカデミーの皆様方には、拙い運営でご迷惑をおかけすることもあったが、温かくお支えいただいたことで、期間中の活動をつつがなく行なうことができた。併せて感謝申し上げます。

最後に、ここに記しきれないほどの多くの方々各グループの探求活動にご協力くださった。今回の年報には諸般の都合から教員が直接担当したグループしか掲載できず、生徒の自主グループ(アドバイザーとして教員が関与)の実施報告が成されていないことが残念であるが、大小併せて28ものグループの活動にご協力くださった学内外全ての皆様に厚く御礼申し上げて本稿の結びに代えさせていただきます。